

日本の住宅における近代化 木材の需要・生産からみた近代の住宅

代表 平山 育男（長岡造形大学造形学部建築・環境デザイン学科 教授）

〔研究論文要旨〕

本研究では、近世における民家の移築に触発され、近代における製材工場の進展と木材供給の増大に伴い、町並みにおける建築構成の変化を明らかにすることを目的とした。

本論では先ず、日本における製材機械の導入について、江戸時代末期のグラバーによる製材、天竜川沿における製材業の実態を明らかとした。また、『製材工場一覧』、『工場通覧』などの資料により近代における製材工場数の変遷を追い、これらが木挽賃金、鉄道の普及、電気の敷設により徐々に増加し、関東大震災のより一段の発展を遂げたことを示した。

他方、製材機械の普及を支える木材の生産については、国内材の生産が大正時代中期でピークを迎え、以後は輸入材が不足を補うようになり、関東大震災以後は、その動きに拍車のかかったことを示した。

以上を受け、製材機械の普及と町並みにおける建物の変遷について、和歌山県橋本市中心市街地における事例を具体的に検討した。その結果、橋本市の中心市街地においては明治 43(1910)年の通電直後となる大正 2(1913)年、電気を動力源とする製材工場が開設されるや、活発な建築活動の展開されたことを示した。そして、町並みでは建物がそれ以前より軒高が高くなり、軸部や木部を露出する真壁、軒先では加工された木製部材によって構成する複雑な構法が広まったことを示した。

研究代表者の当初の問題意識の端緒は、民家における移築の減少・消滅であったが、その問題の在りか探求する内に、それは近代における木材と言う建築材料の供給と加工法に行き着いた。しかも、機械製材という加工法は電気の普及という、いわゆる動力革命と同時進行し、建築の新しい形と木材の流通を押し進めたといえる。そのような観点から、電気の全国における普及が要因となり、大正時代こそが近代の住宅史においては1つの画期となると考えることができるとの結論に至った。